

アイデアの結晶化に向けて- Youkobo Returnee Residence Program, YRP 第3弾
「回顧と展望 - 遊工房30周年」
ークリントン・キングとジュリー・カーチスと素晴らしいアーティストたち



アイディアの結晶化に向けて- Youkobo Returnee Residence Program, YRP 第3弾

「回顧と展望 - 遊工房30周年」

ークリントン・キングとジュリー・カーチスと素晴らしいアーティストたち

もくじ

I. 「回顧と展望 - 遊工房30周年」	
1. 事業の紹介・AIR事業の評価	02
2. 今回の活動の要約	
2-1. 滞在創作活動	03
2-2. アーティストトーク及びディスカッションイベント	04
II. 参加作家エッセイ	
1. 「ブックエンド(物語)」	05
2. 「旋回」	06
3. 「2020年を迎えるために」	07
4. 「善良なるスポーツ精神2019」	08
5. 「日本を理解する：遊工房アートスペースでの2か月間の滞在」	09

事業の紹介

アーティストレジデンスは、アーティストの創造的な実践において重要な役割を果たし、支援環境のもと、実験的試みを行う場を提供することで、異なる文化や環境と繋げ、有意義な方法で探求する一助となっている。これは、芸術家の創作活動において、しばしば予期しない、後の段階で新たな創造の形として結晶化するような新しい発見へと導いている。

遊工房アートスペースは、芸術家支援活動30周年を記念し、過去の滞在作家を対象に、更なる創造的な研究の発展を目的とした Youkobo Returnee Residency Program, YRPを2017年から開始した。参加アーティストは、遊工房で作品を展示する他、前回と今回の経験をもとに作家活動の変化や共有、参加者側・運営側双方にとってのレジデンス事業の意義などについて議論する公開トークイベントも行う。合わせて、招聘滞在期間に国内作家との協働活動や、同時期滞在の海外作家との交流の機会を積極的に設けている。

AIRの評価

2019年10月に再来日したクリントンとジュリーは、1989年から始まった遊工房のAIR事業の345人目のアーティストである。遊工房は2019年に30周年を迎えたが、YRPは、AIRの価値を考察する重要な機会でもある。

一般的には、AIRの評価は難しいと考えられているが、その意味で、YRPは、遊工房がここ数年行っている重要な調査テーマである、AIRの価値についての議論・言語化、そして数値化を試みる格好の機会である。

作家からの協力を直接得ながら、彼らにとっての初めてのAIR経験と、その後の作家活動の発展、2回目のAIR経験を、具体的に形として表すことが出来る。経験を数値化・視覚化することは容易でないが、その考察に対して私たちは強い意志がある。

AIR運用がベースの遊工房アートスペース、その30年の節目を機に始めたYRPの、2019年の招聘3回目、1組のアーティストの活動から、AIRの価値と評価を考察したのがこの報告である。

比較検討、評価の言語化、計数化など、補助金事業に付きまとう大事な観点かと思う。ここでは、図れない、又は図らない面、何時も大切にしている事象を述べるに留めたい。

AIRは作家自身の活動の館であること、それに尽きると考えている。従ってAIR自身の評価は、利用者・作家が主体的に語る事が重要と考えてもいる。作家が滞在制作の機会と場の選択をすることが第一義的にあり、遊工房は、希望する作家の選考をするのではなく、作家の活動要求の実現に無理がある場合のみお断りすることと考えている。敢えて加えるなら、作家の生き様の役に立つ場と機会である遊工房そのものの存在が全てと考えている。作家の成長の軌跡は、その後付のシナリオでしかないと考える。私たちが目指すのは、創作活動を続ける芸術家にとってのAIRの価値を見える化することにある。



2017
David Franklin



2018
Saara Ekstrom

滞在制作活動

例年11月を中心に、地元の都立公園での野外アート展「トロールの森」と同期した、大事な活動期間の一つとして位置づけている。2019年のこの時期、同時期滞在の5人の紹介から始める。

再招聘プログラムの招聘の2人①、30年来のお付き合いの地元で活躍する作家②、そして、国際機関推薦での作家1人③、マイクロレジデンス間の相互交換プログラムの研究者1人④の、合計5人のにぎやかな遊工房であった。それぞれの独自のテーマが交差する、また、北半球（欧州、米国）、南半球（大洋州）からの作家達との国際色豊かな、多様な参加達の交流する「遊工房2019年秋」となった。

①Clinton King & Julie Curtis | Residency period 2019.10.01 -11.30, residency space AIR-2

アーティストの良きカップルの兩人、NYC・ブルックリンを拠点に活動のアーティスト。クリントンは、彫刻、ビデオ、絵画など多様なメディアを扱う。ジュリーはフランス人アーティストで、絵画と彫刻作品において頭角を現している。駆け出しの作家時代の2005年、遊工房で約2年間の長期滞在経験があり、13年ぶりの再来日は、売れ子作家となった忙しい中を工面しての、2か月間の創作滞在であった。出発点としての機会は、アーティストとしての活動の場とアートコミュニティを取得出来る機会であったことの重みを聞くことにもなった。

②Ryozo Takashima | Working period 2019.10.01-11.30, creative space Studio-3

前述の「トロールの森」開始年・2002年の参加作家で、地域の公立公園を使つての野外展解説時の協力者でもある。その中身を吟味せずひたすらその「勇ましさ」に追随する閉塞した空気の蔓延している、日本の現代美術と組まない、彼の近作を幾つか再現してくれた。

③Hikaru Clark | Residency period 2019.10.01-11.30, residency space AIR-1

AsiaNZ財団から毎年1名の作家受入をしている。ヒカルはその4人目に当たる、オークランドを拠点とするアーティスト。2020年オリンピックに向けて、東京で起きている建築の移行に焦点を当て調査・研究、西洋の永続的な建築概念とは対照的な日本の建築哲学“スクラップ・アンド・ビルド”など背景の成果発表となった。

④Yang Chen | Residency period 2019.10.01-11.30, residency space R-3

マイクロレジデンス間AIR交換・studioName（英国・レスター市）との交換作家として2カ月の調査・研究滞在。ヤンは、ロンドン在住のレスター大学美術館研究科・博士課程研究生。戦後の日本アートコレクティブ「実験工房」と東京都美術館の関係を理解、理論的な枠組を明らかにすることを目指している。滞在中の遊工房30周年イベントへも積極的に関与してくれた。



アーティストトークおよびディスカッションイベント

日時：2019年11月10日（日）Part1 | 11:00～14:00、Part2 | 15:00～17:00

会場：遊工房アートスペース：ラウンジ及び各作家スタジオスペース

テーマ：「回顧と展望」

特別ゲスト：五十嵐太郎（建築史、建築評論家・工学博士）

進行：辻真木子、Yang Chan

通訳：池田哲

Part1・サブテーマ「なんでこうなるの・・・？」として、「タンDEM/縦一列」と題する2人展、「1984+36」とした個展、「善良なるスペース精神」を語るオープンスタジオ、3カ所のそれぞれの作家のスタジオでのフロア・トーク交えての質疑応答の後、ラウンジでのトークと熱心な討議を展開。

Part2・サブテーマ「なんでこうなった・・・？遊工房30周年」では、遊工房30年の活動の報告と、その後に継続する、参加作家との関わりからの人と人の、マイクロレジデンス同志の、関連機関など、多面的に繋がる、ネットワーキングの現状の共有と、ネットワークを通じた一層の交流を確かめ合うことが出来たと考える。

巨大な費用を背景とした国際イベントとなっているオリンピック・パラリンピックの東京開催を翌年に控えた年でもあり、作家の意識の中に色濃く反映される内容が読み取れる活動であったと思う。

世界的な視点からのアートマーケットの変化についてのNYCからの話題、原住民への尊厳の道を明らかにした大洋州諸国の話、国家と文化芸術、欧米と非欧米、美術と建築、首都と地方都市、個人と集団、自由と権利・・・、厳しくも有意義な議論の場の共有が出来たと考える。

同時に、全くローカルな事象かもしれないが、同時期、名古屋市を中心に開催中の「愛知トリエンナーレ2019」の開催継続の蛇行の動きや開催費用の見直しなど、公的機関（政治家）同志の不可思議な論争、それに増長する形での民意の炎上など、当時の社会背景も絡めての、活発な議論の展開ともなった。

参加者其々の、世界観を背景とした自由な議論は、多くの問題提起と、この先の方向性を考える良い機会となったと確信する。それぞれの多様性の理解を基に、異文化の受容される社会の出現を期待したいと考える。地域アートが花盛りのこの島で、緩やかな文化革命が進んでいることにならないよう祈る。

Exhibition at Youkobo Art Space
November 2019
3^{SUN} ▶ 23^{SAT}
12:00 ▶ 19:00
Mon & Tue Closed Last day till 17:00

Clinton King
Julie Curtiss
Hikalu Clarke
Ryozo Takashima
Yang Chen

The poster features a red background with a white door graphic. It includes a collage of colorful abstract art, a pair of red lips, a landscape photo, and a white cube. Logos for various sponsors are at the bottom.



ブックエンド（物語）

クリントン・キング

遊工房アートスペースに初めて訪れたのは2006年の夏である。これは、私が日本に初めて長期間（2年間）滞在することになる始まりの印であって、私にとって大きな変化となった。

私の日本到着には、アイデンティティの危機が伴っていた。数ヶ月、日本で暮した後、その危機は落ち着き、当初の新しい文化に浸ることでの興奮は、深い不安感に変わっていった。この新しい文脈の中で、以前は快適で、おそらく受継がれていた習慣と習慣の不十分さとその限界を感じた。友人がユーモアを理解できないとき、衣服がうまくフィットしないとき、言葉で失敗したとき、参照が平坦になったとき、自分のお気に入りの音楽や映画を誰も知らないとき、外部の文脈固有の記号表現によって、あなたは自分のアイデンティティがどれほど支配されているかに気付くだろう。生々しく感じた。私が、その最初の旅行で落ちなかったことに気付いた人物。そして、日本で本当の自分を再発見しなければならなかった。

遊工房を初めて訪れたとき、私の中の何かが変わった。大人になるための最初の変化の踏み台としてこれを常に忘れない。そこで過ごした時間は、自分自身や世界との関係、そして強いては芸術的実践をどのように思い描くかという劇的な進化を余儀なくされた。

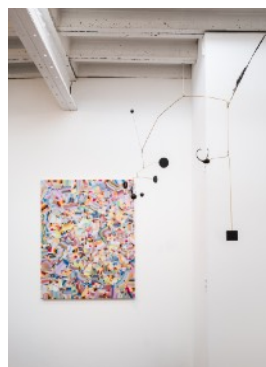
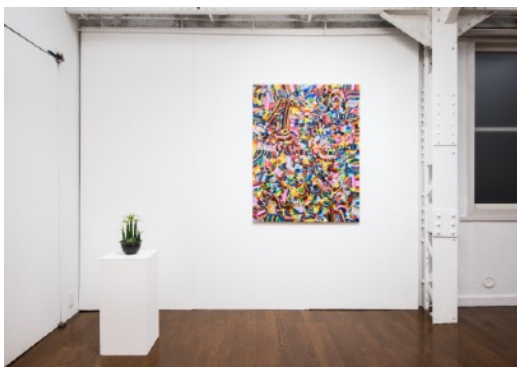
これらの理由から、10年以上経過してからまた遊工房に戻ることは、単にアーティストレジデンスに参加することよりもはるかに意味があった。私にとって、遊工房は日本で仕事をする時間とスペース以上のものを提供した。ニューヨークのアーティストとして、遊工房を去ってから、私が過ごした12年間の間に起こったことをすべて振り返る機会を与えた。アーティストはキャリアを積むにつれて、常に前進し何か新しいことを試みようとする。新しいギャラリーでの展示、新しいキュレーターとの提携、新しい異なるレジデンス・プログラムへの参加などである。しかし、遊工房が再来日アーティストをホストすることを続けているなんて天才的だ。私が見つけたように、皮肉なことに、どこかに戻る前に、どれだけ変化したかを完全に把握し、どのように進化したかについて正直に言うことができる。

ニューヨークで10年間活動した後、遊工房に戻ったこの巡礼の旅は、私自身の環境では気付かなかったであろう事柄を可視化した。私の最初の訪問時のように、それは私が遊工房でしか得られなかったと確信した視点を与えた。それは私の人生の形成期を表す。

遊工房にいることは、私の仕事に直接的な影響と長期的な影響を与えた。私の最初の訪問時と同様に、私は自分が誰であり、私の練習が何であるかについての先入観を捨てる期間を経験した。私は彫刻でMFAを取得したが、近年では、彫刻から主に絵画を手がけるようになってきている。しかし、遊工房に戻って彫刻の制作を復活させる衝動と自由を得た。滞在中に、いくつかのモビールを制作した。それぞれが日本の独特な素材の形から引き出されたものである。たとえば、神社のカラスの羽、地元の植物の黒い種の莢、東急ハンズの黒いゴムの形を取り入れたもの。別のものは、ミニチュアの鐘、エアープランツ、イミテーションの柿、ウルトラマンのおもちゃ、何個かの日本の人形、および埴輪の置物などで構成されている。

このように限られた時間内で制作せざるをえなかったことで、私は自分の創造の限界と長所に気付いたのだ。私の絵は非常に手間のかかる過程を考える仕事を伴い、遊工房での時間的制約下で座って直観をコントロールしなければならなかった。制作に直観の余地があることに気づき、続けるうちに自分の仕事のできることでできないことについて、先入観を捨て自由になりたいと考えた。

遊工房にいる間、アーティストのジュリー・カーティスと私はスタジオで、村上春樹の本「海岸のカフカ」のテープを聞いた。村上の小説には、主人公がひっくり返すとパラレル・ワールドに入る超自然的な石がある。この石は、この代替領域への道を開けたり閉じたりするのに役立つ。村上の本とレジデンスでの時間を振り返ってみると、遊工房は私にとってのブックエンドであったとおもう。それは、ニューヨークでの過去12年間の私を占めて来た芸術的実践の始まりと終わりを表している。ある意味で閉じる時であり開く時であることに気づいた。遊工房を前に訪れた時のように、私には自身の創作の新しい目標へと活動を始める準備ができていた。



昨年の秋、私は、遊工房アートスペースの滞在制作・再招聘プログラムの一環で、選ばれて、再度、遊工房に滞在することができた。10年以上以前・2008年に、遊工房に滞在していた、両方の経験は各々異なったものとして創造的で芸術的な経験であったことは確かである。

10年前に遊工房のレジデントとして最初に滞在したとき、私は、学校を卒業したばかりでまだ、芸術家としては駆け出しで、些か孤独で、知識やアイデアを交換できる芸術的なコミュニティとのつながりを模索した。遊工房は、そういう私を、信頼できるアーティストのインターナショナルな関係と繋げ自分自身と修練を進めるためのプラットフォームを与えてくれた。しかし、それ以上に重要なことは、支え、励まし、思いやりのあるアートコミュニティがどのようなものかを示してくれたことである。

遊工房での最初のレジデンスは、今の私の創作の基礎を築くために役立った。滞在中、私は、日本の女性向けに販売されている凝った美容養生法と不安を煽るような教育パンフレットの内容に興味をひかれ、ローカルなファッション雑誌と一緒に収集して墨を使って修正を加えた。クリントン・キングとの二人展「Split Ends」で発表した、この一連の作品は、人工と自然、美、そして不可解な文化的基準と身体がテーマであり、今もこのテーマに取り組んでいる。

遊工房での今回の滞在中、長い間私を魅了してきた日本特有の事柄に焦点を当て、新しい仕事を追求したいと思った。食品サンプル：レストランが、お客を誘導するために使用する超現実的で奇妙に美しいプラスチック食品サンプル。食べ物は私の作品の中で繰り返し登場するテーマになっており、たびたび、魅惑的なものとおぞましいもの間の多孔性を探る方法として、現代の生活の超現実主義的な要素を掘り下げて、私たちの肉体的な食欲が贅沢で異常で奇妙なもので刺激させる。このレジデンスのおかげで、他の方法では入手の困難な素材を使用して、作品を深く豊かにするインスピレーションの源に囲まれ、まったく新しいシリーズの彫刻を作成することができた。また、今回はガッシュでの白黒の絵画に戻り、将来の仕事の基礎を築く機会として利用した。日本滞在中、神社仏閣、浮世絵など、その他の日本の伝統芸術をリサーチした。これらの見識は、新しい方向性やアイデアと実践に取り組もうとする私の疑問に大いに活力を与えた。たとえば、神社仏閣で見える屏風絵で使用されている図像、空間の使用法、描画の技法を見ると、この直の体験から強く引き出される新しいシリーズのプリントに着手する切掛けができた。

遊工房アートスペースで育まれたユニークなコミュニティは、レジデンスの決定的な部分であり続けていることに深く感謝している。私が参加した遊工房の企画トーク・イベントと、内輪のチャンネルの機会の両方で、仲間のレジデント・アーティストと豊かな対話することができた。それは私たち一人一人がアートの世界についてより微妙でグローバルな視点を残せたと感じている。同時期滞在中のヤン・チェンの、比較研究で日本の美術館と海外の美術館との違いについて聞いたことや、政治と芸術の関係について、ニューヨークをベースに活動している私の見解を共有することに至るまで、これらの会話は異文化交流の重要な場面を提供した。地域での「Trolls in the Park」アート・フェスティバルと、遊工房でのクリントン・キングとの2人展「タンデム」を通じて、自分の作品を地域のコミュニティと共有できたことも嬉しかった。どちらの場合も、サンプルに触発された彫刻が、人々が、当たり前と思っていた事柄に、違う見方を受け入れたことを知り嬉しく思った。鑑賞者の反応から、このシリーズ作品が、サンプルに対する認識を変えたことは明白であり、おそらく、これらの日常オブジェクトの芸術性を強調し、同時に反発と魅了の両面からオブジェクトの不可思議さを探っていくだろう。クラフトやプロセスについての会話を引き受けた。これは、他のコンテキストで作品を見る人との議論とは異なる。

遊工房アートスペースは30年目の現在を祝い、10年以上も私を形作ってきた、慣れ親しんだ場所を超えて旅し、貴重なインスピレーションの源泉を活用するためのスペース、コミュニティ、リソースを提供してくれたことを振り返り、この組織に深く感謝する。レジデンスは終了したが、遊工房の私の創造への影響は今後何年も続くだろう。



「2020年」を迎えるために

高島 亮三

私は「個人」と「集団」の関係性から、その発展形として「集団」が行き着く先の「国家」という集合体の捉え方を、自身の作品製作時のバックボーンとしてきた。今、私が表現のフィールドとしている場所、つまり現代の日本では、主導者の「勇ましさ」を是とし、その中身を吟味せずひたすらその「勇ましさ」に追随する閉塞した空気(権威主義パーソナリティー)が蔓延しているように感じている。そんな時代の動向に思うところがあり、ここ数年はジョージ・オーウェルの小説「1984年」に描かれている全体主義国家の掲げるスローガン「WAR IS PEACE. FREEDOM IS SLAVERY. IGNORANCE IS STRENGTH.」(戦争は平和なり。自由は隷従なり。無知は力なり。)をテーマにした作品を制作してきた。本書はそれらの近作をまとめたものであり、タイトル「1984+36」は、いうまでもなくその「1984年」から36年後を想定した、極々近い未来の日本をイメージしている。

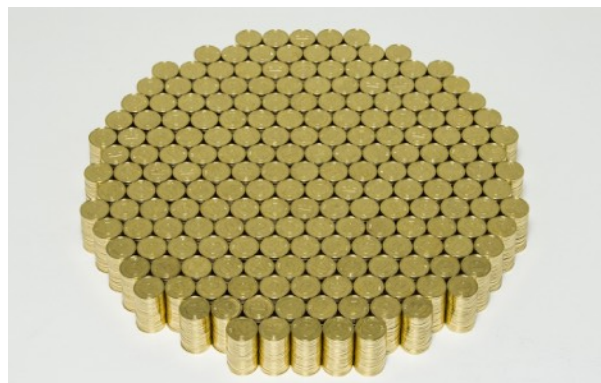
実際のところ、個人レベルで国家の有様といった壮大な問題を考えたところで、必ずしも大した答えが導き出せるわけでもないし、その答え自体に完全な正誤があるわけでもない。また、所詮無名の美術家の影響力などいかにほどのものか。しかしながら私たちは自分自身に、そして他者へと自分たちのあるべき立ち位置を常に問い続けなくてはならない。「1984+36」年ではなく「2020」年を迎えるために。

【長めの付記】

本書の編集も佳境の2019年8月、愛知県で開催されていた現代美術の芸術祭、あいちトリエンナーレ2019における企画の一つ「表現の不自由展・その後」が、その展示内容を巡り度重なるテロ予告や脅迫によって展示中止に追い込まれた。これまでも公共施設での展示が、批判に伴う過剰な自主規制等によって中止や撤去された例は数多くある。しかしながら本件において、公の立場であるはずの自治体の長が自身の主観のみを以って、該当企画展示の中止や関係者への謝罪を公然と求め、それが少なからず民意を得たことは特筆すべき出来事であった。もはや「1984+36」年の扉は間違いなく開かれ始めている。皆さんと共に、その扉の前で踏みとどまるため、厚かましくも本書がその一助になることを願ってやまない。

図録より

'1984+36 TAKASHIMA Ryozo'
ISBN : 978-4-9908274-2-7
©Youkobo Art Space 2019



1962年にインドネシア共和国(以下、インドネシア)で開催されたアジア競技大会において、当時の開催地大統領であったスカルノは、親中華人民共和国、親パレスチナ政策と足並みを揃えるべく、イスラエルと中華民国(台湾)からの競技参加者の入国を拒否した。

これは国際オリンピック委員会(IOC)がその憲章で掲げる政治からの中立性への挑戦と受け取られたが、これに対しスカルノは、ベトナム民主共和国(当時の北ベトナム)と中華人民共和国がIOC加盟国として認められていない時点で、IOCの存在が本質的に政治的であると批判した。そしてインドネシア共和国はこの行為をもって、オリンピック憲章違反と判断され、IOCから資格停止処分を受けることとなった。

そして翌年の4月、スカルノの指揮の下、10か国(カンボジア王国、中華人民共和国、ギニア共和国、インドネシア、イラク共和国、マリ共和国、パキスタン・イスラム共和国、ベトナム民主共和国、ソビエト社会主義共和国連邦)が参加する、オリンピックに対抗するイベントの開催が発表された。

「国際オリンピックが公然と帝国主義者の道具となっている…スポーツには何かしらの政治が伴うことは当たり前のことである。インドネシアはスポーツと政治の融和を提唱する。GANEF0(新興国スポーツ大会)を設立する…既存秩序に対抗するために」

GANEF0の革命的宣伝句が東側諸国のレトリックに沿って謳われる一方で、そこではオリンピックに用いられている様々な儀式的行為も踏襲された。真逆のイデオロギーに立脚していながらも、対立する権威の言語に適応したのである。

このある種の盗用のような方法を用い、祝賀という行為を模倣または再利用しようと試みかどうかを判断するのは難しいが、イデオロギー的立ち位置を抜きにしても、「既存秩序」と称した国々を競わせることにより、革命の旗の下に国際的なスポーツ祭を開催したのである。

オリンピックがスポーツの純粋性を提唱する一方で、数十億ドルものスポンサー契約や寄付に見られるように、IOCは本質的に政治に結び付いているのである。

スカルノ自身も同じような誤信から抜け出せずにいた。第二次世界大戦での日本軍のインドネシア侵略による解放まで、それまでの間インドネシアを植民地支配していたオランダ王国によりスカルノは投獄されていた。帝国主義に対し非常に批判的であった個人が、その帝国主義の力で権威を獲得することが出来たのである。



日本を理解する：遊工房アートスペースでの2か月間の滞在

ヤン・チェン

私の師が遊工房の研究滞在プログラムに関するstudionAmeからのメールを転送してきたとき、それは千載一遇の機会だと思った。このレジデンシーが日本をより深く理解することを可能にできるかもしれないと願った。以前数回日本に行ったことはあったが、平均約10日間の滞在でしかなかった。短い期間では、観光以外の日本の側面を見ることはできないと感じていた。さらに、国立国会図書館のデジタルデータベースに、東京のサイトでしか見ることができないドキュメントをも発見した。なので、レジデンシーが私を受け入れてくれたら、図書館で十分な時間を費やし、それらのドキュメントを手に入れ、新しい何かを発見できる。幸いなことに私は選ばれた。出発日程が近づくと、少なくとも馴染みのない国で新しい生活を始めるわけなので、興奮と不安が入り混じった。

遊工房に到着直後に他のアーティストに会う機会があった。全員が私よりずっと年上だったので、彼らから新しいことを学びたいと思った。驚いたことに、この組織は創立30年目で、記念トークイベントの開催が予定されていた。その終日のイベント全体の準備と実行に自分も参加できてうれしかった。日本人に囲まれるのは初めてで、英語を話せる人々と、話せない人々がいた。言語の壁があったとしても、人々はお互いにコミュニケーションをとるため最善を尽くしていた。私がここで経験した最も貴重な経験の一つは、日本の芸術の世界が現在どのように機能しているかを知る機会をようやく得ることができたということである。私は、画壇が日本の芸術界をコントロールするために、まだとても強力だったことに感銘を受けた。100年以上にわたって存在してきたシステムとして、その活力は、どのように伝統を保持継続させているのものかと思った。私の研究中、日本の文化には伝統と革新という2つの側面があることに気づき、現時点では、まだ、この2つの側面を見ることができている。たとえば、国立科学技術革新博物館では最先端の人間のようなロボットを見ることができ、100年以上も変わらなかった技術を使って手仕事を続けている日本の職人にも会うことができる。さらに、トークイベントの前に、私はすべてのアーティストのスタジオを訪れ、彼らの作品のイメージをつかんだ。今回の滞り期間中、遊工房には、ニューヨークから2人、ニュージーランドから1人、日本から1人の計4人のアーティストがいた。ニューヨークの2人のアーティストは、12年前にここでレジデンシーを行い、遊工房の30周年を振り返るために招待された。また日本人アーティストは、組織の知古でもあった。彼らの作品を見て刺激を受け、日本人と西洋のアーティストの概念的な違いに気づいた。トークイベントの議論の中で、日本の美術界の人々が東京オリンピック2020について懸念を抱いていることを知り、将来、日本の美術界を大きく変える可能性がある。

トークイベントの企画に参加したことに加えて、武蔵野美術大学での講演にも招待された。予想外であった。単なる観光客の身では大学の人々と連絡を取る機会がないから、それは大変良い機会であった。聴衆は、油絵部の1年生と3年生で、私は彼らに日本の美術館の歴史を講義することにした。彼らは静かで質問は無く。教師は、若い美術学生を鼓舞するのは難しいと言っていた。この状況が2020年以降に変わるかどうかに興味がある。

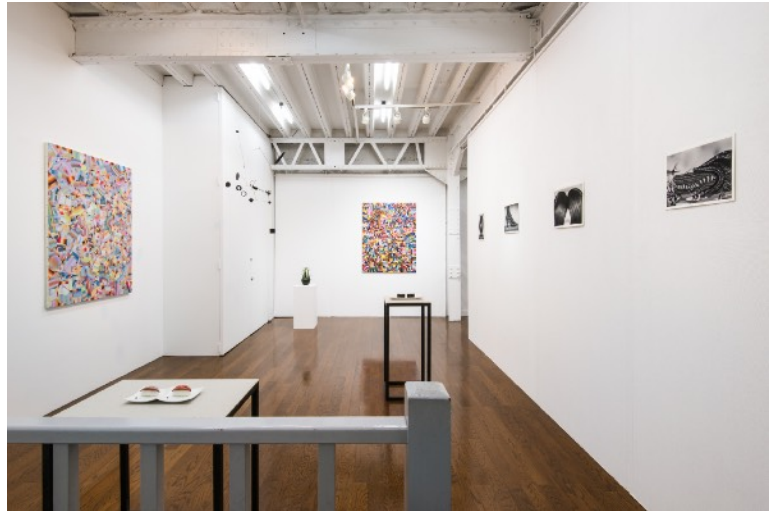
実際、私は国立国会図書館で多くの時間を過ごした。明治時代の博物館システムの確立に関する公式報告を含む多くの新しい文書を発見した。日本がサウスケンジントン博物館と1ハイドパークでの大展示から学ぶ必要があると述べた資料。新しい文書に基づいて、現代（明治）のアートワークのための美術館が美術館システムの一部ではなかったことは明らかで、代わりに、政府によって決定され授与された、コンペティションに関連するアートのプロモーション。東京都美術館の空虚についての関連する議論は、明治以降、そして私の研究が埋めることができる戦後の期間までさえ、文書には決して現れなかった。また、博物館のカノンと画壇のカノンについても新しいアイデアがあった。アーティストが入ろうとする西洋の美術館とは異なり、日本の美術館にはこの機能がなく、代わりに、画壇はアーティストを昇進できるかどうかを決定した。アヴァンギャルドなアーティストは、戦後、代替スペースを使用して画壇に挑戦しようとしたが、継続的に失敗した。

全体的に、遊工房で過ごした2か月は、日本と日本の美術界を異なる角度から見る事ができた。将来また戻りたいと思う。

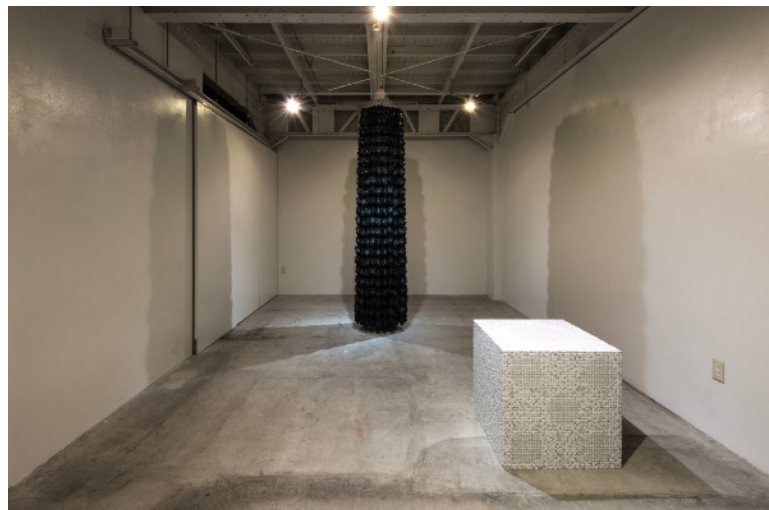


Exhibition

Photos of works by Masaru Yanagiba



TANDEM / tandem
Clinton King & Julie Curtiss
Studio-2, Youkobo Art Space



1984 + 36
Ryozo Takashima
Studio-3, Youkobo Art Space



In the spirit of good sport
Hikalu Clarke
Studio-1, Youkobo Art Space